
黄金の小魚と、白銀の龍

asaghi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金の小魚と、白銀の龍

【ZPDF】

N1856M

【作者名】

asagi

【あらすじ】

昔ある所に、黄金の湖がありました。

清らかな湖にいつからか住んでいたのは、黄金の小魚なのでした。

昔々、ある所に。

一体何故、そうなつたのか、近隣の村人達も首をひねっていたのですが、朝な夕なに、傾いた陽を受けて、底の方から、淡く黄金に光り輝く湖が有りました。

清らかな水を湛えたその湖は、一番近くの村からは一本道でつながり、また、幾つもの綺麗なせせらぎが注ぎ込み、湖は、滝を作つて、小川に水の流れを流し込みます。

周囲は、木立で囲まれ、水面は風に揺れて、四季折々の花や木々を映します。特に、赤や白に彩り豊かに咲く、シャクナゲが美しいとされていました。

近隣の村の人々は、湖水が黄金色に、光る事等、子供の頃より、当たり前の風景だったので、別に気味悪がりもせず、畠仕事の帰り道、樵の仕事の途中、喉を潤したり、身体を洗つたり、夕餉のおかずには、魚を取ることなどして、この湖に慣れ親しんでおりました。

ある日を境に、村の子供達が、噂するようになりました。

『湖に、黄金の小魚が棲んでいる。』

と。

大人達が見に来れば、確かに。ゆらゆら、ひらひら、きらりと。身体をくねらせているのが見えます。尾びれをゆっくり、動かして泳いでいるのが見えます。確かに金色の、小さな、尺上に届くか届かないほどの小さな魚です。一体、いつから其処で暮らしていたのでしょうか。

水面の上で跳ねて見たり、湖底が見えるほど、何かの拍子に、湖水が透明になる隙を狙つて、ゆっくり、上がつて来るのすら、見え

るのです。

「ああ、棲んでいるねえ。黄金の小魚。」

子供たちに何か言われる度に、大人たちは、そう呟きました。

「別に、悪いものでもないようだし、棲んでいても、良いのではないのかい？」

「こうも言つのです。

「でも、漁にかかったら、氣味が悪いから離してしまつかも知れないねえ。」

この道三十年の、ベテラン漁師からそれを聞いた時、子供達は、大喜びしました。

黄金の小魚は、黄金の湖に、いつまでも棲んでいても良いのです。

そんなある日。

湖に、『悪い男』がやつて参りました。

男は、田つきが悪く、一瞬もじつとしておらず、常にきょろきょろして、時間を無駄にするのが惜しいと言つた様子で、村人達から、様々な事を聞き出していました。

その晩は、村でも一軒しかない小さな旅籠に泊まり、夜も更けてから、行動を開始したのです。

実は、湖が黄金色に光るのは、理由が有るのです。

湖の底には、それだけを材料にして家が作れるほど、沢山の砂金が降り積もつていたのでした。陽の光を受けて、光つていたのは、砂金だつたのです。

暗闇の中で、一人とぼとぼと道を急いでいた男は、湖のほとりに辿り着いてから、辺りを見回しました。

誰もいません。少し風があります。夜空で幾つかの星が、きらきらと光つていています。

この様子では、男が周りが良く見えるようにと、火を焚いても、

誰からも、見とがめられは、しないでしょ！」

「しめしめ。」

男は、想いでいた袋から、そつと、道具を出し始めました。

「これで、この湖の砂金は、俺様一人の物さ。」

数ある道具の中でも、一番大きな縄で作られた袋を身体に結び付けて、そろそろと、水中に入ろうと足を付けた刹那。

「そつはさせるものか！」

水面から勇躍、飛び上がって来たものがありました。

弾丸のように、強い風で飛んで来た木つ端のように、男の顔を、直撃します。

「うわあ！」

たまらず、男はもんどううつて、湖面に倒れこむように、水中に没します。そのときを狙つて、小魚は、そうです、あの、黄金の小魚です。小さな口を一杯に開けて、男の喉といわば、耳といわば、滅多やたらに噛み始めたのでした。

あつと詰う間の出来事でした。丸太のようになつた男の体が動かなくなつたのを見極めてから、小魚は呟きました。

「この砂金は、村の人の為の物だ。誰が、お前なんかに。」

小魚は、村人達に、感謝していたのでした。漁で取られなかつた事、偶然釣り上げて、放してくれた日も有りました。

「少しば、恩返しになつたかな？」

そう言つた時です。異変が起きました。

小魚の体が、不意に、輝き出しました。と、瞬く間に、見る見る、大きくなり、体がずんずん、長くなつて行くのです。

「何が、起こつたんだ？」

小魚は、叫びました。そして、水面から顔を出した自分の姿を水鏡で見て、一度、叫びを上げました。

「龍。龍だ！」

其処にいたのは。黄金の小魚では有りませんでした。全身が白銀の鱗に覆われ、一本のヒゲと角を持つ、一体の龍に他ならなかつたのです。

「一体、これは・・・・。」

その時、湖中に不思議な光が溢れ、虹の輝きを持つ星の光の中から、厳かな声が、彼の耳に届いたのです。

“龍よ。もともと、お前は、飛天の使いをつとめる、白銀龍であつた。

どうじても、地上で修行をしたいと言つので、これまで、小魚の姿に変えて、

地上で暮らさせていたのだ。

だが、私は一つ、お前と約束をした。

それは、地上で一つ良い事をしたら、龍の姿に戻し、修行を完全に終えたと見るまで、

高い山の上、仙境で暮らしそう、やはり、仙人や天界の為に、様々な仕事をすると云つものだ。

今の気分は、どうだね？”

言われている内に、少しづつ、遠い遠い昔の記憶を取り戻して来た龍は、湖を含む、周囲を見回しました。生まれて始めて見る、と

言つ氣だけはしませんでした。

夜明けが近いのか、東の方から、風が吹いて来ました。少し
ずつ、稜線が仄見えて来ます。

お別れです。村人達とも、子供達とも、水辺で咲くシャクナゲと
も。

どつちみち。こんなに、身体が大きくなってしまっては、龍は湖
では暮らせないのです。

龍は一度だけ、吼えました。水面を渡る風の音に良く似た、湖の
ほとり、林の木々の梢を揺らす風の音に紛れるかのように、優しい、
吼え声でした。

夜が明けた後、黄金の湖は何も無かつたかのように澄み切って、
そこにはあの男の姿は影すらも有りません、いつものように、満々
と水を湛え、シャクナゲが、花弁を水面に落とします。

そして。

ひらりと泳いだり水面に跳ねたりする、小魚の群れの中に、あの
黄金の小魚の姿も、既に無いのでした。

彼が何処に行つたのか、水面にその姿を映して流れる雲は、誰に
も何も、答えてはくれませんでした。

昔々の、お話です。

*

* The End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1856m/>

黄金の小魚と、白銀の龍

2010年10月9日18時17分発行